

# 古典文学における地殻変動

——主として古事記、日本書紀の場合——

瀧野 實

## 1. はじめに

洋の東西を問わず、古典の部類に属する書物の記録には、それが詩歌（含叙情詩、叙事詩）を含む文学、歴史、地理、神話、宗教などのいずれにかかわらず、記述された時代、あるいは、その時代以前の自然環境そのものや、自然現象、例えば火山活動や地震および津波などと考えられる記述箇所を散見することができる。

日本最古の歌集である万葉集の巻三には、『国之中三從 出立有 不盡能高嶺者 天雲毛 伊去波伐加利 飛鳥母 翔毛不上 燎火乎 雪以滅 落雪乎 火用消通都…』と富士の噴火がうたわれ、また豊後国風土記には、『戊寅年大有地震 山崗裂崩 此山一峽崩落 愠湯泉 處々而出 湯氣熾熱 炊飯早熟…』とある。これなどは、おそらく火山性の地震を引き金として生じた温泉湧出の状況描写とみることができぬだろうか。

他方、BC 8 世紀の頃、ホメーロスは、その著『イーリアス』の24巻の中で、エーゲ海北部のレムノス島の噴火について、「サモスの島やインブロスや煙にこもるレムノス島へと…」記述し、BC 5 世紀の後半、アテネの歴史家ツキジデスは、その著『戦史（ペロポネソス戦争）』第3巻の中で、20世紀の現代においても時折活発な火山活動をおこなうシチリア島エトナ火山の噴火について、「エトナ山から燃える溶岩が噴出流下した。そのため、エトナの山麓に住むカタネー人の領土の一部が潰滅した。——（途中略）——ギリシャ人がシチリアに植民してから、かくの如き噴火は前後3回生じた。」としている。

また世界的古典の一つでもある旧約・新約聖書の中にも、地殻変動にもとづく地表面象かと思える記述箇所をUSA ケニヨン大学教授デニス・ベイリー氏は、同氏の著書『聖書の歴史地理』の中で、例えば、民数記16章30—31節の「地が口を開いて彼らとその家族、ならびにコラに属するすべての人々と、すべての所有物をのみつとした。」

や列王紀上19章11節「地震の中には土はおられなかった。」等の箇所のほか、新約聖書のマルコ15章38節「神殿の幕が上から下まで裂けた」ことを、マタイは地震にその原因を求めているとして、同氏はマタイ27章51節の箇所をとりあげている。そして、それら現象の地質学的、地震学的一論拠として、神殿地区が構造上弱い線の上にあることを指摘し、現在そこに立っている回教の寺院が歴史上、地震で一度ならず少なくとも747年と1033年、1060年に損害をこうむり、修復の記録からも知られるとしている。このほか聖書とかかわりの深い地域、シリアやアラビア等における火山活動に論及し、聖書に記載された現象と地殻変動との関連性を示唆している。

ところで我国における古典、およびこれをつくった日本民族創成の基盤である自然、つまり日本列島の地殻構成を巨視的に一瞥し、本小論理解の為の一助としたい。

日本列島は太平洋プレート及びフィリピン海プレートとユーラシアプレートの接合する部分、すなわち沈み込み型の典型的なせまら変動帯に位置している。かつて、海底の部分において形成された低角巨大逆断層と、それによる隆起部が、西日本では九州山地、四国山地、東日本では奥羽、北上等の山地として現在、我々の眼前に姿を横たえている。つまり逆断層を伴った褶曲山地である。

またプレートの接合部分にできた歪みとしての褶曲山地の内側、すなわち弱線部に沿うかたちで、火山や火山活動に伴う温泉の分布がほぼ規則的にみられる。ここでは構造的および火山性の地震、それらによる断層、火山活動による隆起や陥没、さらに温泉作用による風化の促進、そして浸食や崩壊、堆積作用等が安定地域に比較するに殊の他いちじるしい。とくに日本の褶曲山地では、地震や火山活動による小刻みな破碎帯が多く、火山地帯はおしなべて未固結の岩石が山地、台地、扇状地等を形成する場合が多い。

したがって地殻変動の影響を受け易い構造線上にある地域や、活火山の周辺の諸地域に生活圏を

有していた古代の人々による古典文学の中には、地殻変動に伴う地震、火山の噴火、溶岩の噴出とその溢流は言うに及ばず、地表の裂罅、地滑りなど、古代に生きた人々の知識では計り知るべくもない、いわゆる自然の持つエネルギーによる破壊力と、それによる想像を絶する現象が人々の視覚、聴覚などの感覚をとおして、言わば直接的表現を以てリアルに記述されている箇所がある。

さらに留意すべきは、神話に該当する部分においても、それ等自然現象をして、超越者や特定人物の行為・行動および心的葛藤の譬喩の形態をもって記述されていると考えられる箇所を指摘できることである。

元明帝の和銅5年(712年)にできた古事記の場合、記述の内容が皇室中心で、皇位継承やそれを主とした人間関係に加うるに、国内統制についての記述となっており、自然現象そのものや、対外交渉史的な面についての具体的描写が日本書紀に比するに極めて少ない。しかし、それにもかかわらず、古事記三巻のうち上巻の神話の特定部分については、地殻変動に基づく現象として注目に値するものがある。かかる部分については、日本を代表する地球物理学会の第一人者であられた寺田寅彦先生による地球物理学的立場からの御判断、御見解を参考にすると、地殻変動に基づくと考えられる地表における諸現象が、神々の行為・行動、あるいは心的葛藤の描写に込められた譬喩として、いわゆる間接的な表現の形態を以て採りあげられ記述されているとも考えられる箇所と、その箇所の理解が比較的容易である。

それに比べて、元正帝の養老4年(720年)に編纂された日本書紀には、地殻変動による自然現象と考えられる箇所の記述がきわめて具体的、かつリアルである。加うるに5世紀以降の自然現象発生については、年月等の記載があり、理科年表その他の諸文献と照合しながら考察するのに好都合であった。

本小論では考察の順序として、自然現象の状況把握が比較的、客観的にやり易い日本書紀の考察を先におこない、自然現象の記述が神話の領域に偏っている古事記についての考察をその後におこなった。

尚、考察上、筆者は日本最古の古典である古事記についての考察をおこなうに際して、世界の古典である旧約聖書に記載されている文章中、地殻変動によるかと思われる箇所をひきあいに出している。それは東西両古典文学のもつ共通性的一端を把握することができればとのささやかな筆者の考えからである。

## 2. 5世紀とそれ以降における地殻変動

5世紀とそれ以降の地殻変動考察のための年表として、東京天文台編集(1987年版)の理科年表を使用した。そのうち『日本付近の被害地震年代表』と『日本のおもな火山』を考察の参考とした。

○日本書紀の中で5世紀と、それ以降にみられる地殻変動として最初に記述されているのが、允恭帝の5年(416年)の地震である。

五年秋七月丙子朔己丑、地震。先是、命葛城襲津彦之孫玉田宿禰、主瑞齒別天皇之殯。則當地震夕、遣尾張連吾襲、察殯宮之消息。時諸人悉聚無闕。

これは允恭5年7月14日(416年8月23日)に畿内地方に地震が発生し、先帝、瑞齒別帝(反正帝)の仮廟の安否を気遣ったものである。

理科年表では、地震の影響のあった地域を『河内』としている。これは日本の歴史に記録された最古の地震であるが、日本では5世紀になって、大陸文化の影響を受け文字を使用するようになり、地震に関する記録が為されるようになった。従って、それ以前の我々の祖先は文字によって地震やそれによる被害を後世に伝える術は知らなかったのである。然し日本列島に人間が住みはじめたのは考古学の研究から、おそらく少なくとも1万年以上も前であり、その頃から既に我々の祖先は多くの地震を経験してきたであろうことは否めない。

○推古帝の7年4月27日(599年5月28日)には紀内一帯に発生した地震により、多くの建築物が倒壊、破損している。

七年夏四月乙未朔辛酉，地動舍屋悉破。

理科年表によれば、地震の影響のあった地域を『大和』とし、マグニチュード7.0と推定している。

○天武帝の4年（675年）の11月と同6年（677年）の6月に地震が起っている。その規模、被害の程度は不詳であるが、一応記録にとどむべき程度のものではあったと推測される。

○天武帝の7年（679年）12月に九州を中心に発生したと考えられる地震と、それによる地形変化および被害状況がかなり具体的に記録されている箇所がある。

是月，筑紫國大地動之。地裂廣二丈，長三千餘丈。百姓舍屋，每村多仆壞。是時，百姓一家有岡上。當于地動夕，但曾明後，知以大驚焉。

理科年表によれば、マグニチュード6.7と推定されており、記録の内容からして、直下型の地震により裂罅現象が生じたと解することができよう。

当時、筑紫の呼称は九州全域を指すのが通例であっただけに、記録されている場所を現在のどこであったか同定することはほとんど不可能に近い。しかし、記録から、地震により多くの村落のほとんどが倒壊したのみでなく、地面に大きい裂罅現象を生起せしめたと言うのであるから、震度もさることながら、その被害の規模、範囲の大きさは推して知るべしである。

注目すべき点として、かかる大変動の折、すなわち大地が裂け、山体の一部（あるいは麓の丘陵）が地滑りの崩壊をしたにもかかわらず、岡の上に在った一農家が一夜のうちに、そのままの状態でも移動したという記録である。後述のように、寛政4年の島原『眉山崩壊』の場合にも同様の現象がみられており、現象内容の比較には恰好のものと言えよう。

とくに筑紫の国の中でも、いわゆる別府——島原地溝帯に位置する地域や、鹿児島湾地溝帯は地殻構成上、プレートの歪みの位置にあり、構造性地震および火山活動に起因する火山性地震、そして両者もしくは、そのいずれかによる断層、沈降、隆起等の運動が顕著にみられる地域である。

例えば、島原半島の胴体部を東西に横切る雲仙地溝帯は、通常Unzen Riftと学会で称されている言わば典型的なRift Valleyである。ここでは南北方向の分裂、拡大の進行規模が年間1.4cmという値が三角測量の結果から得られている。また地殻の拡大に伴う地盤の沈下が水準測量の結果、年間0.2～0.3cmという値が得られている。

然るにUnzen Riftとその周辺地域は、地震多発地帯であることに加えて、垂直および水平運動による地殻のきわめて不安定な地域であると言うことができよう。さらにこのリフト内では島原、雲仙、小浜などの温泉湧出と有史以後においても、火山噴火、溶岩流出のみられる火山地帯でもある。

この地域における火山性地震を引き金とする地滑り現象は、1792年（寛政4年）5月21日に発生した雲仙岳東麓の溶岩頂円丘・眉山東斜面の大崩壊の場合にこれをみるができる。

眉山の崩壊時の火山性地震の震度は、理科年表ではマグニチュード6.4としている。元島原火山観測所長片山信夫氏および九州大学理学部教授太田一也氏（理博）は、眉山崩壊の特徴について次のように説明しておられる。

眉山の崩壊は震源、震度など火山活動の科学的データによる判断のほか、藩および民間の記録等をも参考にして総合的に結論づけておられる。それによれば、火山性の地震を引き金とし、さらに付加的要因として、水噴火を滑材とした地滑りを伴った崩壊現象であるとの説である。

さて、天武7年の地震の折、丘の上の百姓の一軒屋が夜中に発生した地滑りにもかかわらず、家屋が何ら破損することなく移動し、翌朝に周辺の変貌ぶりを見て驚いたという記録の箇所に酷似の現象が1792年の眉山崩壊の折に生起している。『守山庄屋寛政日記』の中の文章が即ちこれである。次に関係の箇所を紹介する。

「島原上之原の者に菜種を苜置候に付番屋をしつらい朔日に暮頃より畑の中に番致し居候処右之大地震に付恐れおのき番屋の内に打臥居候処方々に泣き叫ぶ声物凄く聞こえ候に付いかなる事に候や鳴動震動さまざまに生きたる心地もなく打臥居たる処に四ツ半頃と覚しく世間少し静まり候に付番屋口にはいより世間を見るに星明かりにすかし見れば山の様子大にかはり元の畑も菜種は有なから方角様子大にかはり候に付こはいかにと思

い恐ろしなから外へ出て見れば汐の音間近に聞こへ候間能相考へ候へは暮頃来り候畑より遥かに海中へ押出され漸翌二日助命致候由是等は誠に不思議と存候へ共又左にあらず吹飛たる山々に小松中松等其儘有之候へは可有事かと存候。」

○天武8年(680年)10月より同15年(686年)12月の7ヶ年の間に有感地震が15回、噴火を伴う火山活動かと思われる現象が3回記録されている。

- すなわち天武8年10月11日(地震)
- 天武8年11月14日(地震)
- 天武9年6月8日, 14日(火山活動)
- 辛亥, 灰零。丁巳, 雷電之甚也。
- 天武9年9月23日(地震)
- 天武10年3月21日(地震)
- 天武10年6月24日(地震)
- 天武10年10月18日(地震)
- 天武10年11月2日(地震)
- 天武11年正月19日(地震)
- 天武11年3月7日(地震)
- 天武11年7月17日(地震)
- 天武11年8月12日(地震と火山活動)
- 壬申, 有物, 形如灌頂幡, 而火色。浮空流北。每國皆見。或日, 入越海。是日, 白氣起於東山。其大四圍。戊寅, 亦地震動。
- 天武11年8月17日(地震)
- 天武13年10月14日(地震と火山活動)
- 天武14年12月10日(地震)
- 朱鳥元年〔天武15年7月改元〕
- 正月19日(地震)

なかでも天武11年8月12日と天武13年10月14日の地殻変動に伴う諸現象を考察するとき、天武7年12月の地殻変動が九州を中心とするものであったのに対して、天武11, 13年のそれは東北(含北陸)、伊豆諸島から近畿一帯、四国太平洋沿岸一帯にわたる、きわめて広域に被害の及んだ性格のものであったことが理解できる。

壬辰, 逮于人定, 大地震。舉國男女叫唱, 不知東西。則山崩河涌。諸國郡官舍, 及百姓倉屋, 寺塔神社, 破壊之類, 不可勝数。由是, 人民及六畜。多死傷之。時伊豫温泉, 沒而不出。土佐國田苑五十餘萬頃沒爲海。古老曰, 若是地動,

未曾有也。

是夕, 有鳴聲如鼓, 聞于東方。有人曰, 伊豆嶋西北二面, 自然增益三百餘丈。更爲一嶋。

理科年表によれば、684年11月29日にフィリピン海プレートがユーラシアプレートの下部に潜入する部分、すなわち室戸岬の南方約120-130kmあたりに震源を有する海底断層と考えられるもので、震度はマグニチュード8.4と推定されている。同年表では、この時の被害や被災地域について、『土佐を中心に南海、東海、西海の諸道で、この地震で山崩れ、河川の氾濫、家屋、寺社の多くが破壊され、さらに震源域を中心に、ほぼ400kmにわたり沿岸一帯は波高10~20mの津波が襲来したとしている。その結果、人畜の死傷がおびただしかったのみならず、とくに土佐では多数の船が沈没し、田畑が約12kmほど海中に没した。』としている。

さらに本文中、後半の部分において、火山活動かと想定できる記録の箇所に注目したい。

天武13年10月14日の大地震発生の夕方、東方から太鼓の如き音が聞こえ、伊豆嶋の西北方向2箇所で、自然に土地が300丈ばかり増えたとしている。

ちなみに理科年表で伊豆大島の三原山の噴火記録をたどってみると、684年(天武13年)の噴火は噴火活動のきわめて盛んな活動期であったとすることができる。しかし、これが現在の伊豆大島なのか、また仮に伊豆大島であったとしても、伊豆大島のどの場所の噴火であったのかは現在に至るも解明されるに至っていない。

筆者は火山フロントの位置と活火山の活動状況から、伊豆大島や三宅島等を含む相模トラフに沿った火山島における比較的巨大的な噴火活動ではなかったのではないかと推測している。

○天武14年(685年)3月に火山活動とそれによる被害の記録がある。

是月(三月), 灰零於信濃國。草木皆枯焉。

理科年表によると685年(天武14年)に群馬、長野両県境に位置する浅間山の噴火記録がある。噴火に伴う降灰地域が信濃の國一円であり、日本書

紀の本文にも草木のほとんどが枯れたとあることから、安山岩質の爆発的火山噴火は、噴煙中に多量の亜硫酸ガスや硫酸の微粒子を付着させた、主として火山灰から成る火山放出物によって、広く山林、原野が被覆されたものと考えられる。

### 3. 4世紀とそれ以前における地殻変動

わが国、諸外国を問わず、古典と称されるものの中には、地殻変動に基づく地震、裂罅、山地の崩壊、火山噴火と火山灰の空中被覆、溶岩流出、津波の発生などと、それによる人間はもとより、動植物の生存機能の破壊作用などが、超越者や特定人物等の行為、行動そのものとして、人格化あるいは神格化されたり、あるいは、それら（超越者や特定人物等）の意志や行為、行動の譬喩として、自然現象そのものが採用されていると考えられる箇所を見出すことができる。

とりわけ、わが国最古の古典である古事記、日本書紀の4世紀とそれ以前の記述部分には、これを指摘することができる。今回は古事記、日本書紀両古典の神話の分野における地殻変動、とくに火山活動と考えられる箇所の具体的な記述事項を一～二抽出し、日本における地球物理学会の第一人者であられた寺田寅彦先生の御所見を拠り所として考察する。

○乃參上天時、山川悉動、國土皆震。（古事記）

○始素戔鳴尊、昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴响。（日本書紀）

古事記の描写は火山の噴火に伴う火山性地震で、日本書紀のそれは、どちらかと言えば火山の爆発的噴火が、素戔鳴尊の性格、行動の譬喩として織り込まれたものかと考えられる。

寺田寅彦先生は「普通の地震よりも、むしろ特に火山性地震を思わせる。」と評しておられる。

参考までに、世界的な古典でもある旧約聖書の出エジプト記19章18～19節には、『主が火の中であって、その上に下られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ちのぼり、全山はげしく震えた。ラッパの音が、いよいよ高くなったとき、モーセは語り、主は、かみなりをもって彼に

答えられた。』とあるが、これぞ、まさしく超越者の意志や行為・行動の譬喩と考えてはどうであろうか。

ドン・ボスコ社の聖書の註によると、ラッパとは「かみなりのことらしい」とある。日本における雷は「神鳴り」に語源があると解されている。雷雲による雷発生や、火山雷発生等のメカニズムを知らなかった人々にとっては、雷は神が鳴らすものと信じ、いわゆる近代科学の知識に基づく科学的考察のメスの入る以前までは、かかる超人的な現象に対して、未知なるが故に過度の恐怖心をさえ募っていたようである。ちなみに、昭和52年8月8日、北海道の代表的火山である有珠山の噴火の模様を毎日新聞は、『まっ赤な火柱が山頂に立った。……火山活動の間断なく耳をつんざくような雷鳴、走る稲妻、山が怒り狂っているようだ。』と報じている。

日本の古典を代表する古事記、日本書紀のほかにも例えば、大日本史、三代実録、日本紀略、吾妻鑑、続日本紀などに、『空中に雷の如き声あり。』のような表現をもって多くの鳴響記事がある。

旧約聖書は言うに及ばず、古事記、日本書紀において、とりわけ神話の部分に記述されている自然現象は、記述されているその箇所における具体的な現象と言うよりも、むしろ超越者の意志や、行為・行動の譬喩として、過去あるいは記述されている地点を含む自然的、歴史的、社会的に直接、間接にかかわりのある地域に生じた自然現象が採用されているものもあると考えて然るべきと思う。したがって、そこに画かれている現象は地殻変動と何ら関係のない、全くの荒唐無稽なものとは考えられない。

筆者は考察上の一論拠として、1985年にイスラエルのヘブル大学教授Doran Mor博士（理博）より、

The last volcanic eruption in our area was approximately 4,000 years ago, from the North east of the Druse Mountain in Syria. The time was derived by C<sup>14</sup> age determination on the bones of animals which were burried under the lavas.

On their volcanic impressions to the Israelites, and that authors of the Bible used

this knowlege, for instance, in the description of the events on Mount Sinai, when Moses recived the ten Commandments.

(原文のまま)

と御教示を給わった。

ドン・ボスコ社刊の聖書によると、全聖書序論「靈感」11ページ下段で、『人間として人間の表現を用いている人間の著者は、比喩を用いたり、自然現象をしるすために、当時の表現を用いたりしているが、それは許されていることである。そういう表現は、比喩として解釈するか、あるいは科学的な事実（記述されているその場所における、いわゆる狭義の科学的事実・瀧野）ではなくて、単に自然現象の記述として解釈しなければならない。たとえば「神のいかり」、あるいは「後悔」などが聖書に出てくるが、それは比喩的な言い方である。』と記述されており、自然現象の解釈上の見解がきわめて明瞭に示されている。

歴史的に考えても、シリアにおけるBC2.000年前後の火山活動は、メソポタミアとエジプトにわたる生活圏を有していた人々にとって、きわめて神秘的なものに映ったであろう。さらに世界最古の都市エリコ（BC7.000～BC5.000年）や、エブラ（BC5.000～BC3.000年）等の古代都市生活者にとっては、エジプト（中王国）やメソポタミア（ウル三王朝）の古代文明の洗礼とともに、地殻変動による地表の諸表現は単なる経験としてだけでなく、彼等の文化の中に採り入れられ、さらにそれらの一部は旧約聖書の中にも、例えば、いわゆる神のみわざの譬喩として受け継がれたのではなかろうか。

次に古事記、日本書紀の神話の分野に属すると考えられる箇所から、火山活動とそれによる災害の記述箇所をそれぞれ一例示したい。

○其泣状者、青山如枯山泣枯、河海者悉泣乾。

是以惡神之音、如狹蠅皆滿、萬物之妖悉發。

(古事記)

○此神、有勇悍以安忍。且常以器爲行。故令國內人民。多以夭折。復使青山變枯。(日本書紀)

寺田寅彦先生は、『万の神の声は狭蠅なす』を

火山鳴動のものすごい心持の形容に応わしく、『河海者悉泣き乾しき』や、日本書紀の『また青山を枯に變す』（古事記では『青山は枯山如す泣き枯らし』）は、噴火のために草木が枯死し、河や海（多くの場合、湖とみるべきかと思う・瀧野）が降灰のために埋められる状況描写、および噴火を地神の慟哭と見るのは何よりも適切な譬喩であるとしておられる。

筆者は、とりわけ古事記の『萬の妖ことごとくに發りき』に注目したい。火山噴火を前提に、いわゆる萬の妖について、一～二例示してみたい。1783年アイスランドのラカギカル噴火の折、大量の溶岩流出のほか、火山灰、二酸化硫黄の大量のガスと青味がかったもやによって、農産物、山野の植物の枯死、人間（10,000人）や家畜の窒息死がある。注目すべきことに、ラカギカル噴火の約1ヶ月前、1783年5月9日より約5ヶ月間、浅間山の大噴火があり、いわゆる天明の大饑饉の引き金となった。

火山の噴火に伴う火山ガスにはH<sub>2</sub>S、CO<sub>2</sub>、N<sub>2</sub>などを大量に含むことが多く、高濃度の場合には人畜にきわめて危険で、他の動植物の成育にも重大な影響を与える。卑近な例としては、昭和54年（1979年）阿蘇の噴火に伴う災害について、松本征夫博士は同氏の著書『阿蘇火山』の中で、「降灰の中に含まれている硫酸、弗素などのために阿蘇郡の農家を中心に、野菜、飼料作物、工芸作物は壊滅的被害を受けた。また、この灰の付着した雑草を摂取した繁殖用雌牛馬は、その多くが胎児を流産し、植林した杉が黒色化して枯死するという被害もみられた。阿蘇は古くから火山灰を噴出する活動をくり返している。そのため、住民は古くから阿蘇山の怒りのないことを切望し、古くから神仏の力に頼るための神事、祭事がおこなわれてきた。」とある。参考までに付記するが、金子史朗博士（理博）は『聖書の奇蹟を科学する』の中で、旧約聖書「出エジプト記7～8章のモーセの10の奇蹟」をサントリーニの噴火に関連づけ、碑文の文字と、ナイル河口付近での火山灰の発見等に論拠を置いて考察が爲されていることに注目したい。

#### 4. 結びにかえて

古事記、日本書紀のみならず、広く古典に描かれた天変地異とも受け取れる自然現象の多くは、古代において、変動帯ことに火山活動の盛んな、あるいは、かつて盛んであった地域において生起していた。そして古典に描かれている自然現象のなかには、それが生起していた地域に居住していた人間が超越者としての神とのかかわりの中で、それぞれの民族のもつ文化に応わしい内容・表現で、それら（自然現象）が記述されていると考えられる箇所もある。それらの古典が、文学、歴史、地理、神話、宗教などの分野において、現代のわれわれに継承され、先人の残した足跡に接することができるのは素晴らしいことであり、そこには現代に生きる我々にとって、まさに驚敬の眼を見張らせるものが多々ある。

筆者は日本における代表的古典である古事記と日本書紀を中心に、その中に描かれた地殻変動をとりあげた。その主旨は、古事記と日本書紀を中心に世界的視野から現象に対する比較考察の対象として、世界的古典としての旧約聖書に描かれた相似の自然現象をひきあいにし出すことにより、プレートテクトニクスや火山学の知識を拝借しながら、あくまでも地殻変動および、その一現象としての火山活動を前提として、可能な限り古典の中の自然に対するアプローチを試みんとするものであった。

筆者は古典の中に記述されている自然現象、とりわけ、それらによる災害の記録に該当する部分においては、後世に生きる我々が自然破壊、なにかんずく、多くの災害をもたらす自然現象に如何に対応すべきかを考えていく縁としての内容が網羅されているものと考えたい。

旧約聖書（創世紀 第19章17節——25節）  
——ロトとその家族の救出関連の記述箇所より——

逃れて自分の命を救いなさい。  
うしろを振り返ってはならない。  
低地にはどこにも立ち止まってはならない。  
高い所へ逃げなさい。  
さもないとあなたがたは滅びます。

日はすでに地上にのぼっていた。

とつぜん、天からの硫黄と火とがソドムとゴモラの町々の上に降下した。

同時にこれらの町のある谷間は、地震のために、住民、植物ともどもくつがえった。

筆者は79年のヴェスビオス噴火によるポンペイ、1902年のモンペレーの噴火によるセントピエール、我国では1783年（天明3年）の浅間火砕流による鎌原、1792年（寛政4年）の眉山の崩壊、ごく最近のものでは1985年、南米ネバダデルリスの噴火に伴うアルメロの悲劇などを鑑みると、それら災害に遭遇した幾多の被災者の中には、善人やごく平凡な生活に満足していた多くの人々の他に、敬虔なる信仰者も少なからずいたであろうかと思う。

地殻変動の一現象としての火山活動に起因する、しないとに係わらず、歴史上の、とりわけ古文献としての古典に表れた自然災害を惟るとき、自然そのものの持つ秘めたるエネルギーと破壊力について一考せざるを得ない。

神が人間に造り与えたという自然は、時代の新旧を問わず、その均衡が崩れたとき、人間はもとより生きとし生けるものの全てに対して非情であり、寛容などと言うに値するものは微塵もないのである。現代に生きる我々にとっては、科学の力を媒介として調和ある自然への働きかけをおこなうことと、災害からの回避を完全になすべく最善の努力を払うことこそ、自他ともに課せられた責務であることを肝に銘ずべきであろう。

金子史朗博士は旧約聖書に記述された津波と、それによる災害の箇所として、エレミヤ書第47章2節を指摘しておられる。

主はこう言われる。

見よ、水は北から起り、あふれ流れて、この地と、そこにある全ての物、その町と、その中に住む者とにあふれかかる。その時、人々は叫び、この地に住む者は、皆嘆く。

筆者は、同じ旧約聖書の記述中、とくに火山島の噴火とそれに起因する災害を想定できる箇所として、エゼキエル書第39章6節。そして火山性地

震，溶岩流出等による災害を想定できる箇所として，ナホム書第1章5節等のあることを参考までに付け加えておきたい。

人間として他を，そして過去の犠牲者を思いやる心と同時に，現代に生きる我々としては，人類の将来，未来の確かな人間生活の舞台としての大地の素顔を知る必要がある。過去を振り返り，過去の記録を可能な限り，科学的，分析的に考察することによって，それら現象への対応，あるいは現象発生の予知に対する一助とすることは，広い意味で，全人類の生命の尊厳と防災上の観点からも，きわめて意義のあることと考える。

#### 注・参考文献

- 1) 青木和夫他校注(1982)：『古事記 日本思想大系』 岩波書店 42ページ
- 2) 秋本吉郎校注(1958)：『風土記 日本古典文学大系』 岩波書店 360ページ
- 3) 坂本太郎他校注(1967)：『日本書紀 上・下 日本古典文学大系』 岩波書店 上89ページ 下433ページ
- 4) 高木市之助他校注(1957)：『万葉集 日本古典文学大系』 岩波書店 170ページ
- 5) 寺田寅彦(1961)：『寺田寅彦全集』 岩波書店 215ページ
- 6) 中村一明他編(1979)：『地球科学「火山」』 岩波書店 83ページ
- 7) 馬場嘉一(1962)：『聖書地理』 教文館 47ページ
- 8) バルバロ・デルコル(1964)：『旧約新約聖書』 ドン・ポスコ社 11ページ
- 9) ホメーロス，吳 茂一訳(1971)：『イーリアス，オディッセイア 筑摩世界文学大系』 筑摩書房 293ページ
- 10) マイケル・ウェアイツマン他，矢島文夫監訳(1983)：『エブラの発掘』 山本書店 32ページ
- 11) W. B. Fisher(1950)：『The Middle East 'A Physical, Social and Regional Geography,' Methuen and Co. Ltd., 407p.

Earth Crusts Variation observed in Classical Literature  
—in case of Kojiki and Nihon Syoki—  
Minoru TAKINO